

熊本放送文化振興基金御中

令和5年1月30日

熊本地名研究会

会長 木崎康弘



事業実施報告書

当研究会が令和4年10月22日と23日に実施しました、第28回熊本地名シンポジウム「渡来人の足跡と地名～火の国から肥後へ～」は、お陰さまで成功裏に終えることができました。

コロナ禍の中、動員が心配されましたが、7年ぶりの開催で、これまであまり取り上げられなかったテーマへの関心が高いこともあって、会場となった「くまもと県民交流館パレア」には一般参加者や関係者を含め、約150人の参加がありました。シンポジウムは別紙プログラムの通り、1日かかりで講演と発表5本とパネルディスカッションを行い、多彩な講師陣の話に、参加者は最後まで熱心に聞き入り、充実した内容となりました。

2日目の地域交流プログラムは、古代、葦北出身で百済の高官を務めた日羅の故郷を訪ねるバスツアーを行い、定員に近い31人が参加しました。日羅ゆかりの八代市、津奈木町を見学、芦北町では日羅の研究を行っている葦北史談会と懇談しました。

なお、事業実施の報告にあたり、以下の資料を添付いたします。

- ① 会報「熊本乃地名」第253号＝11月20日発行（シンポジウム概要を掲載）
- ② 熊本地名シンポジウム報告書（全容を収録）
- ③ 収支決算書
- ④ 新聞報道資料

▽連絡先：熊本地名研究会事務局

藤野芳太郎



第28回熊本地名シンポジウム

申請事業の収支決算の詳細

[収入]

項目	金額	説明
自己資金	228,475	積立金繰入
当日資料代	25,000	200円×125人
報告書販売（予約）	60,000	500円×120冊
地域交流プログラム参加費	186,000	6,000円×31人
くまもと21ファンド助成金	570,000	
他の助成金	350,000	熊本公徳会15、熊日文化スポーツ10、熊本放送文化振興10
合計	1,419,475	

[支出]

項目	金額	説明
謝礼・出演料	115,000	基調講演講師 30,000円 発表者15,000円×3人=45,000円、20000円×1人 コーディネーター 20,000円
賃金	39,600	場内整理員 2人=17,600円 司会進行 22,000円
使用料・賃借料	91,620	会場使用料（ホール、控室）82,170円 大型プロジェクタ8,250円 芦北町コミセン会議室1,200円
看板、演題幕作成費	81,400	演題幕、立て看板、名垂れ、受付
委託料	341,000	事前打合せ27,500円 申し込み受付管理110,000円 当日運営費（チーフ、補助員）51,700円 写真、ビデオ撮影費8,800円 チラシ、看板データ作成33,000円 報告書データ作成110,000円
印刷・製本費	244,200	チラシ1200枚×11円=13,200円 レジュメ150部×220円=33,000円 報告書印刷200冊×990円=198,000円
通信運搬費	82,355	受講通知（印刷、郵送）127通分=27,940円 ツアー参加通知（印刷、郵送）31通分=6,820円 報告書郵送82通・宅配料2通分=38,720円 諸通信費8,875円
広告料	220,000	新聞掲載（4回）
飲食費	53,000	出演者、スタッフ弁当代22,000円（1,100円×20人） バスツアー参加者弁当31,000円（1,000円×31人）
消耗費、原材料費	1,960	コピー代、用紙代1,960円
交通費	145,940	地域交流プロ・バス代139,700円（中型2台） 高速道路代6,240円（3120円×2）
傷害保険料	3,400	ツアー傷害保険100円×34人
合計	1,419,475	

122.9.16 熊本日日新聞 17面(文化)

渡来人の足跡たどる 熊本地名研究会40年 来月にシンポジウム

ことし創立40周年を迎える熊本地名研究会(木崎康弘会長)は記念シンポジウム「渡来人の足跡と地名 火の国から肥後へ」を10月22日、熊本市中央区の県民交流館パレアで開く。県内に

多数残る装飾古墳や出土品などから、日本の国家形成に大きな影響を与えた渡来人の活動を学ぶ。

同研究会は水俣市出身の民俗学者・故谷川健一氏の呼びかけで1982年12月

に発足。これまで開いてきた「熊本地名シンポジウム」は27回を数える。

くまもと文学・歴史館の佐藤信館長ら5人が、江田船山古墳出土の太刀銘文や鞠智城出土の木簡に書かれた名前や、6世紀ごろ百済の高官として国政に携わった葦北国造の子・日羅公などについて発表。熊本の地名や朝鮮半島との交流、塩生産などの視点から、古

代熊本の姿を探る。午前10時開演、参加料200円。

翌23日には、日羅公ゆかりの八代市の古墳や地藏堂、芦北町などを巡るバスツアーも開催。先着30人で参加料6千円。

いずれもウェブやはがきなどで事前申し込みが必要。熊日生涯学習プラザ ☎096(327)3125。

シシは、食堂運
レストレ経営者ら4
人の地元の理解が広ま
った人たちが巻き込み
た。22日、仕掛けが必
ずな居場所として一人
必要がある」と普及に
励んだ。(坂本尚志)

こももネットワーク
でフォーラム
山城と似ている」と語った。
吉村武彦・明治大名管教
授(日本古代史)は、大野
城(福岡)、基肄城(福岡
・佐賀)の築城に、朝鮮半
島の百済から渡った官人が
関わった点を取り上げた。
続日本紀には鞠智城を加え
た3城が併記されており、
鞠智城にも官人が派遣され
た可能性を指摘した。
シンポジウムは鞠智城の
認知度を高めようと県内外
で毎年開いており、歴史愛
好家ら約260人が聴いた。
(園田琢磨)

火の国と朝鮮半島 渡来人の足跡考察

熊本地名研シンポ

熊本地名研究会(木崎康弘会長)の創立40周年を記念したシンポジウム「渡来人の足跡と地名 火の国から肥後へ」が22日、熊本市中央区の県民交流館パレアで開かれた。同会は、水俣市出身の民俗学者・故谷川健一氏が熊本地名研究所を設立した翌1982年に発足。シンポジウムは今回で

28回目となった。

基調講演では、くまもと文学・歴史館の佐藤信館長が「火の国と朝鮮半島」と題し講話。歴史書「日本書紀」「宋書」の記述や、江田船山古墳(和水町)から出土した鉄刀などを紹介しながら、火国(7世紀後期に肥前国と肥後国に分かれる)の有力豪族と朝鮮半島との交流について語った。

渡来人という大陸から日本に渡った人を想起したが、佐藤教授は「倭人も、半島や大陸の人にとっ

ては渡来人だった」と指摘。倭人で有力豪族の子だった日羅公について、百済の王に仕えて高官となり、敏達天皇から顧問として請われたが百済の使者に暗殺されたことなどを紹介し、「東アジアを股にかけて活躍した、外交感覚のある非常に開けた人物だった」と述べた。木崎同会長と島津義昭肥後考古学会会長をコーディネーターに、佐藤館長ら6人によるパネルディスカッションもあった。(鬼東実里)



基調講演するくまもと文学・歴史館の佐藤信館長



22日、熊本市中央区

多くの参加者があったシンポジウムの会場（パレアホール）



渡来人が残したものの、地名にも 歴史ロマンに思い馳せる

開会に当たり、木崎康弘会長は同研究会が1982年、水俣市出身の民俗学者故・谷川健一氏の尽力で創立された経緯を改めて振り返りあいさつ。駆けつけた日本地名研究所（神奈川県川崎市）の金田久璋所長は来賓あいさつで近年、民俗学の分野において地名研究が振るわず心もとない現状を懸念する一方、熊本の40年に及ぶ地道な地名研究に敬意を表し、今後ますます研究活動が実り豊かになっていくようエールを送った。

続いて、平井建治副会長がシンポの趣旨説明に当たり、熊本の渡来地名とみられる波多（宇城市）や百済来（八代市）などを挙げ、「おおむね3〜7世紀の古墳時代に朝鮮半島や大陸から渡って来た」などと今回の渡来人に関する考え方を示した。

地名を手掛かりに古代「日本」の国家形成に多大な影響を及ぼしたとみられる朝鮮半島や中国大陸からの渡来人の痕跡を追う熊本地名シンポジウムが10月22日、熊本市中央区の県民交流館パレアで行われ、県内外から参加した140人が古代の歴史ロマンに思いを馳せた。「熊本地名研究会」創立40周年の記念事業で、地名シンポ開催は7年ぶり28回目。今回のテーマは「渡来人の足跡と地名」火の国から肥後へ。

また、朝鮮半島との外交権をめぐる磐井の戦いが起きるほどに往時、人々は行き来していたとみられる上、葦北の人、日羅（にちら）のように倭人でありながら百済の王に仕えて高位にまで昇り詰めるなど日本からも渡って行って、双方で渡来人たちが活躍していた痕跡が指摘された。

第28回熊本地名シンポジウム開く

熊本乃地名

ニュースレター

発行者 熊本地名研究会
会長 木崎康弘
発行所 〒861-8037
熊本市東区長嶺西2-12-21
藤野芳太郎 方
TEL-FAX (096) 386-1313
題 字 松野国策書

地名研究会 告知板

12月 行事日程

- ◆例会 パレア会議室6
12月18日（日）午後1時30分～
「肥後の古代製鉄遺跡」
元荒尾市教委・勢田廣行氏
- ◆勉強会「万葉集を読む会」
最近参加者が少なくなり、テキストや
実施日時等を講師の小崎氏と調整中。
- ▶ 右上の QR コードで地名研の活動
やお知らせ等もご覧ください。





田川内 1 号古墳を見る参加者たち

第 28 回熊本地名シンポジウム 2 日目は 23 日、バスツアー「日羅の故郷を訪ねて」を実施した。シンポジウムのテーマ「渡来人の足跡と地名」で、主役の一人とも言える葦北出身の日羅の事蹟を訪ねてみようという企画。この日は、体調不良による欠席者も出たが、ほぼ定員いっぱい、31 人が参加した。好天のもと、午前 9 時、2 台のマイクロバスで熊本市市民会館前を出発。高速道路を使って、まず八代市日奈久の田川内（たのかわち）1 号古墳に向かった。田川内 1 号古墳は、日奈久の町中に入る手前、肥薩オレンジ鉄道の踏切を渡って緩やかな坂を上った所にある。古代には線路

近くまで海岸線が迫っていたとい、古墳がある場所には縄文時代の貝塚も現存している。古墳は横穴式石室の内部に円文などの装飾を持つこと



日羅の墓とされる塚

で知られており、墳丘の形は円墳だったと考えられている。あいにく、熊本地震の影響で内部の見学はできなかったが、大木に囲まれた墳丘と脇に広がる貝塚のたたずまいに、一行は葦北君が活躍したであろう古代に思いを馳せていた。次いで向かったのは同市坂本町百済系の下にある百済来地蔵堂。百済来は球磨川水系の百済来川沿いに発達した村落で、奥地ながらも小平地が広がる。ここも、日奈久と同じく、昭和の町村合併前は葦北郡に属していた地で、古代には葦北君の力が及んでいたと想像される。寺には本尊の延命地藏と日羅の墓と伝わる塚がある。祀られている仏像のうち 1 体が盗難に遭って以来、本堂の奥は立ち入れない。しかし、格子越しに見る本尊は、日羅が父親（阿利斯塔）に贈ったといわれがあるだけに、厳かな雰囲気を感じさせていた。本堂の手前左手にある日羅の墓とされる塚は、密やかながら



芦北町では葦北史談会と懇談した

懇談の後、津奈木町にある日羅將軍神社に向かった。佐敷から広域農道を使って海岸近くを走って行くのと、見晴らしのいい高台に日羅將軍神社がある。こ

こは海上の小学校で有名になった津奈木町赤崎の地。日羅は軍人ではないが、服装の姿からこう呼ばれるようになったという。神社は近世の創建のようだが、日羅の遺体を載せた船がこの辺りに着いたと言いつた。一行が神社に着くとサプライズが待っていた。地元の方がお茶とお菓子を用意して待っていてくれたのだ。この予期せぬ出来事に一同は大喜び。お参りを済ませると、口々に感謝の言葉を述べて、神社を後にした。バスツアーの最後は芦北町田浦の「野坂の浦」の見学。万葉集に長田王がうたった「葦北の野坂の浦ゆ 船出して 水島に行かむ 波立つなゆめ」の歌碑が不知火海に突き出した岬に建てられている。波穏やかな内海と、その先に横たわる天草の島々は、万葉の時代と変わらぬ情景を映しているように思われた。歌碑の前に参加者全員で記念撮影を行い、今回のツアーを締めくくった。

(藤野記)



最後に野坂の浦で記念写真（芦北町田浦）

も歴史を感じさせるものであった。昼食は芦北町佐敷の旧薩摩街道沿いにある古い商家を改装した佐敷宿交流館でいただいた。一昨年の豪雨で 2 階の高さまで濁流が来たそうだが、今はすっかり元通りになり、参加者はベンチやテーブルで思い思いに弁当を広げていた。午後一番は今回のメイン事業、葦北史談会との懇談。町総合コミュニティセンターには史談会（松原久美子会長）の会員も集まり、日羅や葦北君について議論した。史談会の会員 2 名からは「葦北君の勢力範囲は薩摩北部まで広がっていた」とや「日羅と阿利斯塔は球磨に眠る」といった独自の見解が披露され、参加者からも質問が活発に出されていた。懇談の後、センター内にある歴史資料室で町教委の深川裕二氏の説明を聞きながら、展示してある葦北の遺物を見学した。

(1 ページから続く)

の記載があることを指摘した。記述は中国人に上る大家族。肥君が北部九州に進出していたことの裏付けであり、その進出時期に関しては 6 世紀とする説もあるとした。大島氏は、葦北史談会「日羅の会」が日羅を顕彰していく中で、火葦北国造という有力な豪族の家系の出で、百済王に仕えて倭人でありながら高官となった歴史上の日羅に、「一期聖徳太子の師匠」といったさまざまな伝説を紹介。時の敏達天皇に請われて帰国を果たしたものの、百済側の手で暗殺されたという。その注目すべき事績の割には知る人が少なく、認知度アップが課題になっている。

古城氏は、4〜6 世紀の装飾古墳を石棺系、石障系、壁画系、横穴墓系に 4 分類。1 期（4 世紀）の石棺系に、石障系が加わる 2 期（4 世紀）、そして 3 期（6 世紀）の壁画系、横穴墓系へ至る変遷をたどり、画期は 2 期→3 期と指摘。外面飾から内面飾へ、つまりは彫刻から絵画へと移行したと



ありし日の久野啓介さん

民俗学者の故谷川健一氏と親交があり、地名をキーワードとして「日本とは

久野啓介元会長が死去

熊本地名研究会の元会長の久野啓介さんが 11 月 6 日に亡くなった。86 歳。

久野さんは熊本日日新聞の記者時代から

多くの人が大陸と往来

多文化共生 社会だつた

説明した。朝鮮半島の内情を知らなければ描けない装飾がある以上、渡来人の痕跡が否めない。藤本氏は、生命維持に欠かせない塩に関する、古墳時代の沖ノ原遺跡（天草市）や大尾遺跡（宇城市）から天草式製塩土器が大量に出土していること、製塩は大坂湾岸で 5 世紀に突如始まったとみられることなど説明。塩や鉄の生産、馬の飼育の技術は大陸からの伝来が否めない。肥後における製塩に渡来系集団が関わったかどうかは不明だが、大尾遺跡の近くには渡来地名の波多がある。

シンポを締めくくるとパネルディスカッションでは、肥後考古学会の島津義昭会長が木崎会長とともにコーディネーターを務め、佐藤館長ら登壇した 6 氏が顔をそろえた。小岱山製鉄遺跡群（荒尾市）の発掘調査を担当した勢田廣行氏による報告も

何か、日本人とは何か」を探り続けた谷川氏の研究姿勢に共感。谷川氏が 1986 年に日本地名研究所を設立して全国に地名研究の輪を広げる呼びかけを行ったのいち早く呼応し、翌年「熊本地名研究会」の立ち上げに奔走した。以来、研究会の中核メンバーとして会を支え、2003 年 3 代目の会長に就任した。会長として毎年のように地名シンポジウムを開くなど活躍したが、難病のパーキンソン病を患い、2015 年に会長を退いた。

元熊本近代文学館館長、2015 年「宇土半島私記」で熊日文学賞受賞。



討論するパネルディスカッションのメンバー

加わり、登壇者らが会場からの質問に応答。国造（くにのみやつこ）の役割に関し、「6 世紀から地方の統治に当たり、大王 11 天皇に仕えた。地方は 7 世紀の初め 100 ぐらいの国、大きな区画に分かれており、言い換えれば地方の豪族。その中でも有力な地方豪族が火君（肥君）、筑紫君のように『君と呼ばれた』と佐藤館長。加えて、「カヤ（伽耶）」は日本という「任那」であり、「近年、研究が進む韓国の考古学にならった呼び方」とのこと。また、東アジアを股にかけた活躍が語り

このほか、渡来地名の定義から火の国が朝鮮半島、大陸へと進出する中継地となつた北部九州の地域情勢、「火君の権勢を映す装飾古墳に描き出された文様を手掛けた渡来系の絵師はいたのか」「製鉄や製塩などの手法・技術をもたらしたと思われる渡来集団は存在したのか」、さらには、地名と存在したかもしれない渡来系絵師や渡来技術集団との関わりまで論点は多岐にわたり、発掘調査や研究待ちで「謎解き」での応答にならざるを得ない面があることも示された。

今回のシンポジウムは、主催・熊本地名研究会、共催・葦北史談会、後援が日本地名研究所、熊本県教育委員会、芦北町教育委員会、八代市、肥後考古学会、熊本県文化財保護協会、熊本日日新聞社、RKK、TKU、KKT、KAB、助成団体がくまもと 21 フォンド、一般財団法人熊本公徳会、熊日文化スポーツ基金、熊本放送文化振興財団と、各方面から多くの協力と応援をいただいた。おかげで、地名研究会会員以外に多くの参加者があり所期の成果を上げることができ、感謝の念に耐えない。今回の成果は後日、報告書という形でまとめ、事前の申し込み者および関係者に配布する予定にしている。（事務局）

犬毛歩けば...

(60)

ぶらり地名散歩

本渡

(天草市本渡町)

昔から、天草郡部の人達は、本渡へ買い物や遊びに行く時、「本渡へ行ってくる」と言っていた。ところが、その本渡が平成合併で、天草市の中の小さな本渡町になって消え失せようとしている。今でも、私たち島民は、「天草(市)へ行ってくる」とは言わず、「本渡へ行ってくる」と言っている。その本渡は、大正・昭和期に天草の郡都として絶頂期を迎えた。

「ホンド」の初出は、中世に志岐文書の貞永2年(1233)の天草種有議状案に本口(石偏に弓)・本砥とある。そこには河内浦・産島・高浜も出てきて、それらの地域をホンド島と呼んでいた。元徳2年(1330)の宮地村地頭佛意重陳状案には本口村とある。應永6年(1399)菊



(上) 宮地村地頭佛意重陳状案↑

(下) 菊池武朝安堵書下↓



本町への出入り口や地形由来のホト説も

町・下町・浜津・土手・船之尾・川原・山口・南などがあつた。本渡町は、昭和10年(1935)に北隣の本戸村と合併して、広域的な本渡町となった。さらに、同29年

(1954)の昭和大会併で、近隣の佐伊津村・本村・亀場村・柗宇土村・楠浦村・下浦村・志柿村と合併、その後宮地岳村を編入して、名実ともに郡都・本渡市が誕生した。

池武朝安堵書には、本口から変わって本戸が初出される。近世の天領期には、北地区が本戸馬場村、南地区が町山口村であつた。明治6年(1873)、天草出張所が富岡から町山口村船之尾に移転した。天草に行政機関が設置されたのは、寺澤支配の富岡城築城の時である。それ以来、天草の乱後から幕末まで、天領支配による陣屋政治が行われた。それが、明治維新後に長崎支配になり、再び富岡支配となっていた。同22年(1889)の合併で、広瀬村・本泉村・本戸馬場村が本戸村になる。同31年(1898)、町山口村は牛深村と同じく、町制を敷いて本渡町に昇格した。本渡町管内は上

ホンドの語源については、「古代地名語源辞典」(東京堂出版・昭和56年・楠原佑介など)によると、「ホト・ホドは女陰のことである。」とある。民俗学者の柳田國男の説によれば、「日本各地に『ホト』『ホド』の音を持つ表記の地名が残っているが、これらは女性器に似た形の地形だったり、女性器に似た特質(湿地帯)を持っていたり、陰ができる土地などの特徴から名付けられたとされる。アイヌ語で川や河口を生殖器になぞらえるのと類似している」とある。このように「ホト」は女陰として「古事記」にも登場するし、「タタラ」とも関係するとされる。

「ホト」「ホド」の音を持つ地名は、神奈川県川原の保土ヶ谷(ほどがや)を筆頭に、保戸沢(ほどさわ・青森県)、保戸野(ほどの・秋田県)、保戸島(ほとじま・岐阜県、大分県)、保土塚(ほどづか・宮城県)、保土沢(ほどさわ・岩手県、静岡県)、保土原(ほどはら・福島県)、程森(ほどもり・青森県)、程田(ほどた・福島県)、程島(ほどじま・新潟県、栃木県)、程原(ほどわら・島根県、山口県)など全国に散見される。

また、熊本史学の森藤義信氏は、「和名類聚抄」に出てくる波多の転化であるとしている。波多は秦氏居住の地で、pata(海)による海部(アマ)族の関係地名ともいわれる。さらに、肥後考古学会会長の島津義昭氏は、朝鮮の古語で海岸は「タダ」と、教えてくれた。

最後に、本渡の「ホン」と、北隣の本町(ホンマチ)の「ホン」の関連性が以前から気になっている。本渡は千拓前の中世まで海が入り込んでいて平地は僅かだった。それに比べて、本町は縄文時代からの農地である。「本戸」と考えれば、本町への出入

り口だったと解釈してもおかしくない。(会員 平井建治)

寄贈誌

◆「歴史と神戸」(第61巻・第5号、神戸史学会) 特集は「近代地域の生活文化史断片」で、「ひょうご史こぼれ話」として語り口調の「小墓圓滿地蔵尊」など収載。

◆「藤沢地名の会会報」(第110号、藤沢地名の会) 地名講演会「日本の鍼術発展に功績のあつた杉山和一と江ノ島」の要旨を収録。

事務局短信

【会費納入者】(敬称略 区名は熊本市) ◆令和4年分〓有馬真理子(東区)

【会費振込先】 ゆうちよ銀行 (加入者名) 熊本地名研究会 (口座記号番号) 01999009358

編集後記

念願のシンポジウムが終わってホッとしたのも束の間、元会長の久野啓介さんが亡くなった。まるで、このタイミングを見計らったような最後だった。7年前に宇土市で開いた際には、病で不自由な体をおして生まれ故郷の宇土への思いを語られたことが思い出される。以来、シンポジウム開催を心待ちにされていただけに、感慨深い思いで逝かれたのではないかと勝手に思っている。◆シンポジウムを終えて何人かから「よかった」の言葉をいただいたのは嬉しいことであつた。ただ、事務局としては、助成団体への事業報告、シンポジウム成果報告書の編集と、また自分は残務整理に息が抜けない日が続く。(若)

第28回 熊本地名シンポジウム

渡来人の足跡と地名

～火の国から肥後へ～

= 報告書 =



令和4年10月22日、23日開催

(於：くまもと県民交流館・パレアホールほか)

編集・発行 熊本地名研究会

【プログラムⅠ】 10月22日 シンポジウム (くまもと県民交流館・パレアホール)

- 10:00 開会あいさつ (熊本地名研究会会長・木崎康弘氏)
10:05 来賓あいさつ (日本地名研究所所長・金田久璋氏)
10:10 趣旨説明・熊本の渡来地名
(熊本地名研究会副会長・平井建治氏)
10:40 基調講演「火君と朝鮮半島」
(くまもと文学・歴史館館長・東京大名誉教授・佐藤信氏)
11:40 事例発表①「肥君と糸島」
(伊都国歴史資料博物館前館長・角浩行氏)
12:10 = 休憩 (昼食) =
13:00 事例発表②「日羅伝説と葦北」
(葦北史談会事務局長・大島幸輔氏)
13:30 事例発表③「熊本・装飾古墳の発生とその起源」
(嘉島町専任職員・元県文化課主幹・古城史雄氏)
14:00 事例発表④「肥後地域における古墳時代の塩生産と流通」
(宇土市教育委員会文化課係長・藤本貴仁氏)
14:30 = 小休憩 =
14:45 パネルディスカッション
コーディネーター・肥後考古学会長・島津義昭氏
熊本地名研究会会長・木崎康弘氏
16:30 閉会

【プログラムⅡ】 10月23日 バスツアー「日羅の故郷を訪ねて」

- 9:00 熊本市民会館前出発
古墳見学・田川内1号古墳 (八代市日奈久町)
百済来地蔵堂 (伝・日羅公墓) (八代市坂本町百済来)
葦北史談会と懇談 (芦北町総合コミュニティーセンター)
日羅将軍神社 (津奈木町)、野坂の浦 (芦北町田浦)、葦北駅家跡
17:00 熊本市民会館帰着

【主催】 熊本地名研究会 **【共催】** 葦北史談会

【後援】 日本地名研究所、熊本県教育委員会、芦北町教育委員会、八代市、肥後考古学会、熊本県文化財保護協会、熊本日新聞社、RKK、TKU、KKT、KAB

【助成】 くまもと21ファンド、熊本公徳会、熊日文化スポーツ基金、熊本放送文化振興基金



野津古墳群物見櫓古墳出土耳飾り



江田船山古墳出土大刀



鍋田横穴群人型文様